石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第323号　平成22年9月1日発行

当館企画展

加越能の美術

—縄文から江戸時代までの名宝—

特別陳列

加賀藩の美術工芸

特別陳列

アメリカで活躍した日本人画家

東 典男の世界

秋の優品選 —書跡を中心に—

- 主なコレクション展示
- 日本新工芸　石川会展
- ９月前半の展覧会
- 現地見学旅行　参加者募集
- 行事案内
- 所蔵品紹介

「木造馬頭観音立像」豊財院蔵

1F企画展示室

当館企画展

加越能の美術

―縄文から江戸時代までの名宝―

主催：石川県立美術館
共催：北國新聞社
後援：石川県教育委員会、富山県教育委員会、金沢市教育委員会、
ＮＨＫ金沢放送局、第23回全国健康福祉祭いしかわ大会実行委員会

9月11日（土）～10月24日（日）　会期中無休

加賀藩政期、前田家の治めた領域は「加越能」と呼ばれてきました。加賀・能登・越中の三カ国で現在の石川・富山両県に相当します。前田家歴代藩主は文化政策に重きを置き、内外から優秀な職人を多く召し抱えました。その結果、加越能の地は「美術工芸王国」の呼称にふさわしい華やかな美術文化が花開くことになりました。

またこの地は奈良・京都や江戸からほどよい距離があり、政治的な影響を受けにくかったこともあって、古くから独自の文化が発達したことでも知られます。

当館が地方色豊かな美術館として、石川と加賀にゆかりの収集と展示を行う本展は「縄文から江戸時代の名宝」との副題が示すとおり、両県で発見され、制作され、伝来してきた古美術品を紹介するもので、国宝・重要文化財を含む約一五〇件を展示します。造形・装飾の起源ともなる縄文土器など原始・古代の美、白山信仰をはじめとする宗教活動が盛んになった中世にあって、多様化していく信仰を伝えた仏画や仏像、加賀藩前田家による美術工芸王国の確立とそのゆかりの名品など、「加越能の至宝」をご堪能いただきたいと思います。

なお、毎週土曜日は午後七時まで開館時間を延長します。ご来場をお待ちしております。

◇関連行事

講演会　※聴講無料
日時　十月三日（日）　午後一時三〇分～
会場　石川県立美術館ホール
演題　「加越能の美術」
講師　嶋崎　丞（当館館長）

ギャラリートーク　※観覧料が必要です
毎週日曜日午前十一時より

観覧料	個人	団体
一般	一、〇〇〇円	八〇〇円
大学生	六〇〇円	五〇〇円
高・中・小生	三〇〇円	二〇〇円

※団体は二十名以上
当館友の会会員は団体料金

「愛宕権現」七尾美術館蔵

初代大樋長左衛門　飴釉茶碗「聖」

学芸員の眼

古代の美術史をたどる上で、信仰との関わりをなくして語ることはできません。なかでも最も影響を与えたのが仏教です。欽明天皇七年（五三八）、朝鮮半島の百済から伝来し、その後、天皇をはじめ多くの有力豪族が信仰しました。また仏教によって国を治めるとの考えから、国分寺が各地につくられ、仏教を広める拠点として機能していきました。

信仰の対象として、また教えをわかりやすく伝えるための手段として制作されたのが仏像であり、仏画でした。仏像では伝来当時の金銅仏から奈良・平安と推移する中で、塑像・乾漆像・木彫像と変化していきました。仏像の制作は日本の彫刻技術発展の歴史そのものといえるでしょう。古墳壁画にはじまる絵画では、仏の姿や世界を伝える絵像として普及していきました。玉虫厨子、法隆寺金堂壁画など仏教の普及と絵画の発展は深く結びついています。

特別陳列

加賀藩の美術工芸

9月11日(土)～10月24日(日)　会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館

学芸員の眼

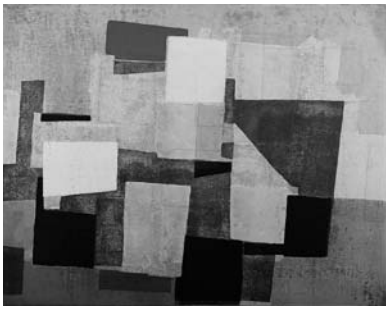
今回の展示は、同時開催する企画展「加越能の美術」と連携して開催するもので、文化人大名の三代利常や、学者大名の五代綱紀が収集し育成した美術工芸品や貴重な資料を中心に、初代利常ゆかりの名品とともにご覧いただきます。今回ご注目いただきたいのは、「前田家の三名物」として永く前田家に秘蔵されていた名品を同時公開することです。もちろん当館では初めての展示です。その三点とは、秀吉から利家に贈られた「大名物 茄子茶入　銘富士」(写真)、豊臣秀次の家臣猪子内匠から利常に献上された「大名物 肩衝茶入　銘浅茅」(いずれも前田育徳会蔵)と、徳川三代将軍家光より利常が拝領した「大名物 大講堂釜」(泉屋博古館蔵)です。こうした作品と対峙することで、江戸時代の将軍家や大名家における茶の湯のあり方を、再認識いただければ幸いです。

前田家の中でも三代利常は傑出した文化大名で、外様大名ゆえの幕府への政治的屈従を強いられた利常にとって、天下一大名を誇示する唯一の方法が、自己の文化政策による反体制的姿勢の表明でした。利常は、後水尾天皇や小堀遠州などとの親交から多大な影響を受けることで、単なる武家文化に止まることなく平安王朝文化の世界ともいうべき内容の名品や茶道具の収集、また長崎を窓口として舶載される名物裂や陶磁器、漆芸品などを求め、またオランダのデルフト陶への注文、さらには豪放華麗な色絵を特徴とする古九谷の操業など、その美意識には他のいかなる大名の追随をも許さないスケールの大きさがありました。当初、武器武具の制作修理を行っていた御細工所を、利常から綱紀の時代には美術工芸品の制作の場へと整備拡充し、漆芸では五十嵐道甫や清水九兵衛を、金工では後藤顕乗を招き、名品の制作とともに後継者の育成にも力を注ぎ、加賀藩の美術工芸は、江戸や京都をもしのぐ勢いでした。四代光高が早世したため、五代綱紀は幼少の頃より祖父利常の強い影響を受けて養育され、利常同様優れた文物や美術工芸品を収集するとともに、入手困難なものは写本や模造品を作成し、それらを整理分類するという、今日的な意味での図書館、博物館的な事業を行い、その精華が「尊經閣蔵書」であり「百工比照」(諸種の工芸、工匠を比較・対照するという意味で、その製品や技法を収集・分類・整理した標本に綱紀が命名した名称で、江戸時代前期の工芸技術を知る極めて貴重な資料)です。

こうして収集育成された美術工芸品を中心に重要文化財五件を含む四十三件で紹介します。(会期中一部展示替があります。)

重文「茄子茶入　銘富士」

「バラライカを持つ裸婦」



「IMAGE IN THE GRAY」

東典男（あずまのりお）氏は、金沢美術工芸短期大学油絵科（現金沢美術工芸大学）卒で、一九五五（昭和三十）年に渡米し、以来二〇〇四年に亡くなるまで、ニューヨークを拠点に旺盛な創作活動を展開した洋画家です。

昭和三年に三重県紀北町に生まれ、名古屋陸軍幼年学校に進み軍人を目指しますが、在学中に終戦となり、二十三年に金沢美術工芸専門学校に入学しました。同校はその後短大となり、クラスには本年六月に当館で回顧展を開催した松本昇、十二月に展覧会を予定している前田さなみ、今もアメリカで制作を続ける長野祥三達がいます。

渡米後はロサンゼルスのシュナード美術学校、ニューヨークのアート・スチューデント・リーグ美術学校に学んでいます。金沢時代、師・高光一也を彷彿とさせる裸婦を描いた東氏の画技は、シュナードの教授をして、「彼の裸婦には教えることは何もない」と言わしめるものでしたが、抽象理論を学び、シルクスクリーンを用いた油彩の抽象画で一世を風靡し、一九六〇年代からの十年間で七千点以上の作品を制作し、十五の画廊と契約して完売するという寵児ぶりを見せています。七〇年代半ば以降は、再度裸婦をテーマとし、マチスの切り絵にも通ずる、鮮やかな単色の色面に無影の裸婦があっけらかんと浮かぶ巨大な作品を次々と制作し続けたのでした。

本展では氏の半世紀に及ぶ創作の歩みを、金沢時代の初期作品から晩年・二〇〇二年の裸婦作品まで、油彩・素描など四十点余の代表作によりご覧いただきます。東氏の画業の全貌をうかがう初の回顧展となります。

第4展示室

特別陳列

アメリカで活躍した日本人画家

東 典男の世界—宙に棲む淑女たち—

9月11日（土）～10月24日（日）　会期中無休

学芸員の眼

「裸婦」東典男

金沢時代の裸婦

金沢美専から短大時代に描いた東氏の裸婦や女性像は、褐色系統と白を基調に的確な形態の把握がなされていて、とても上手いものだと感心いたします。そしてモデル台に横たわる裸婦からは、昭和二十五・六年頃の師・高光一也氏の裸婦が思い浮かんできます。これは先だって開催した「松本昇遺作展」で、松本氏の初期の裸婦を見た際にも感じたことでした。

この頃高光氏の裸婦は劇的に変化していきます。日展系の画家ではちょっとないくらいでした。卵と鶏のたとえではないですが、学生の若い感性に師が鋭敏に反応し、互いに展開していったと見るべきなのかもしれません。

東氏はこの後渡米し、二十年近く抽象を描いた後、裸婦を再度テーマとします。二つの裸婦の隔たりは大きいのですが、アングルやポーズには共通のものを感じます。

「鏡の前の裸婦」
高光一也　昭26

第2展示室

秋の優品選
―書跡を中心に―

9月11日(土)～10月24日(日)　会期中無休

美術館で扱う書跡といえば、行政府の通達から日記、手紙、漢詩、和歌、教典など実に多様です。筆者も、いわゆる能書家のみならず、天皇や禅僧、歌人など様々です。今回の展示は、こうした書の世界の一端を紹介したいと思います。主な展示予定作品としては、「後深草天皇宸翰（しんかん）御消息」、「後奈良天皇女房奉書」、「正親町天皇宸翰御詠草」の重要文化財三点をはじめ、石川県指定文化財の「手鑑」、本阿弥光悦が俵屋宗達工房の下絵に新古今集の歌を記した「鹿下絵和歌」が挙げられます。

このほかに、書と画という視点から池野観了の「赤壁図屏風」と、書のたしなみが中国の士大夫にとって重要な教養であり、その考え方が日本の近世以降も連綿と継承されていたことを示す「琴棋書画図屏風」もあわせて展示する予定です。

展示を概観すると、改めて漢字の情報伝達力に驚嘆するとともに、そこにかなを交えて繊細な心情を表記した日本文化の独自性を再認識することができます。そして、書は人なり、と言われるように筆跡から書き手の人となりをしのぶことも、興味深い鑑賞法だと思います。

本阿弥光悦筆「鹿下絵和歌」

コレクション展示室 主な展示作品

9月11日(土)～10月24日(日)

第1展示室

国宝「色絵雉香炉」
重文「色絵雌雉香炉」
ともに野々村仁清

第3展示室

【油彩画】
「蛾と老人」　鴨居　玲
「鏡の前の裸婦」　高光一也
「SEATED FIGURE」　長野祥三

【彫刻】
「酔っぱらい」　坂　坦道
「歌姫」　得能節朗
「想」　松田尚之

第5展示室

「秋草蒔絵小箪笥」　中野孝一
「友禅白地総菊文振袖『美の饗宴』」　羽田登喜男
「桐造寄木象眼之筥」　氷見晃堂

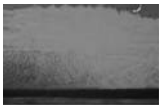
第6展示室

【日本画】
「秋宵」　紺谷光俊
「残照」　西山英雄
「宿屋」　山本　隆

「蛾と老人」鴨居玲

「想」松田尚之

「秋草蒔絵小箪笥」中野孝一



「残照」西山英雄

日本新工芸家連盟は、工芸の原点を見つめ、各作家が素材を生かし技術を駆使して、現代に望まれている生活と美との調和をテーマとして制作活動を続けています。

石川会展も、二十四回目を迎えることができました。会員一同一層の努力を重ねております。より多くの方々にご高覧、ご批判を戴きたいと念願しております。

（主な出品作家）高光一生・北出不二雄・原田実・榎木荘平・戸出克彦・金田一司・瀧川佐智子・向瀬孝之・高光一雅

◇入場無料
◇連絡先　金沢市宮野町ト七四　戸出克彦
TEL　〇七六―二五七―五九五一

企画展示室案内

第24回 日本新工芸　石川会展
（第7展示室）

9月3日(金)～9月7日(火)　会期中無休

九月前半の展覧会

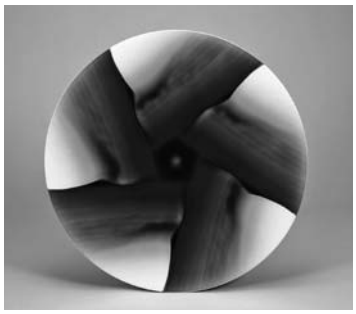
七月二十二日(木)～九月七日(火)

第5・6展示室

特別陳列 徳田八十吉三代展

初代、二代、三代と徳田家の陶芸作品を見ていくと、三者三様に持ち味が異なっています。初代は古九谷以来の五彩の再現に取り組み、深い豊潤な色味の盛り上がるような釉薬を生み出しました。ただ、その画風は山水や花鳥、あるいは東洋の伝統的な図案が骨格をなしており、伝統的な美意識が如実に反映されているといえます。それに比べると二代は、富本憲吉に師事し、新たな意匠の展開を試み、身近な自然の中からモチーフを見出して、金彩を独自の手法で取り込むなど、進取な姿勢がうかがえます。それが三代になると、多様なフォルムの器体に色彩の変化だけの意匠をまとわせるというさらに革新的な表現となり、そのやり方は、国内のみならず世界的にも高い評価を受けました。

現在、第2展示室では「古九谷・再興九谷名品展」を同時開催しておりますが、本展と併せてご覧いただければ、今日まで受け継がれてきた九谷の伝統と創造をたどるまたとない機会になることと思われます。どうぞお見逃しなく。



三代徳田八十吉作「耀彩鉢・雷命」個人蔵

前田育徳会尊経閣文庫分館

大名家の調度

前月に引き続き開催する展覧会で、加賀百万石の大名家に相応しい格式ある調度品の数々から、藩主やその奥方たちの生活の様子を感じ取っていただこうと開催するものです。

展示作品は、床の間を飾った大幅の絵画や書院に置かれた文台・硯箱などの漆芸品を中心とした約二十二件です。前号で紹介した「花鳥図」(王若水筆)や「越中愛本橋図」(佐々木泉玄筆)をはじめ、武家の重要な行事である「鷹狩」が四季を通じて詳細に描かれた巻子、おもてなしに使用された鉢や喰籠、重箱、提重などの食器類、また囲碁や将棋などの遊戯具、婚礼調度の棚や手箱、さらには脇息や刀掛などで、その内容は幅広くお楽しみいただけるものと思いますので、ぜひご覧下さい。

「黒塗薄蒔絵文台・硯箱」

第2展示室

古九谷・再興九谷名品展

今回の展示は、古九谷の意匠の展開と、それがどのように継承されたのかを概観することを趣旨としています。したがって赤絵系の作品は展示されていません。確かに宮本屋窯の主工だった飯田屋八郎右衛門が打ち出した「八郎手」と呼ばれる赤絵細描様式は、九谷焼の展開を語る上で無視できない存在です。そこで今回の展示では、古九谷の色絵や青手の様式が、赤絵そして赤絵金襴手様式に席捲されたのではないことを再認識する目的で、宮本屋窯の青手様式の作品も展示しています。展示室の入り口に立って展示作品を見渡しますと、古九谷開窯に注がれた当事者たちの熱き思いと、制約の多い状況下でそれを継承しようとした陶工たちの意気込みが伝わってきます。

「色絵万年青図平鉢」吉田屋窯

第4展示室

ふしぎがいっぱい

夏休み 親子で楽しむ美術館「ふしぎがいっぱい」の展示室では、受付時、お子さんには、〝あなたが選ぶ、ふしぎ度ナンバー1の作品やお気に入りの作品〟を書いていただく用紙を配布させていただいています。提出された用紙は、「ふしぎがいっぱい」の展示室内に置かれてファイルに納め、展示室を訪れたお客様にも公開しています。

提出された方の年齢も五歳から高校生まで様々で、いろいろな方の感じる心に出会えるファイルになっています。作品へのとらえ方の新たな発見があるなど、そのファイルを読むのもなかなか楽しい活動です。展示室お越しの際は、是非このファイルもお楽しみください。

「雲をたべた男」大場吉美

第四十一回文化財現地見学旅行　参加者募集

武将たちの文化をたどる
～尾張・名古屋を訪ねて～

◇期日
平成二十二年十月十六日(土)～十七日(日)
一泊二日
◇集合
十六日朝七時、金沢駅西口集合
(十七日午後六時頃に帰着予定)
◇参加代金
会員・二三、〇〇〇円、会員外・二四、〇〇〇円

◇見学地

【徳川美術館】
名古屋開府四百年、そして徳川美術館・蓬左文庫の開館七十五周年を記念した秋季特別展「尾張徳川家の名宝　―里帰りの名品を含めて―」が開催中です。徳川美術館の名品が一堂に展示されます。

【名古屋ボストン美術館】
アメリカのボストン美術館が所蔵する浮世絵名品展の第二弾「錦絵の黄金時代　―清長、歌麿、写楽」が開催中です。江戸時代、庶民の文化を華やかに彩った、錦絵の名品をご覧いただきます。

【有楽苑　如庵】
京都建仁寺の正伝院に建てられた茶室を移築した、国宝三茶室の一つです。作者は織田信長の実弟にして、利休に茶の湯を学んだ武将茶人・織田有楽斎（長益）です。茶室だけでなく重要文化財の書院や庭園など、見どころがたくさんあります。

【犬山城】
木曽川の南岸に建ち、日本最古の天守閣で知られる、国宝四城の一つです。現存する天守閣は元和三年（一六一七）に城主となった、成瀬正成によって建てられたものと言われています。

◆申込み方法
往復はがきに「文化財現地見学」希望と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・ご住所・お電話番号・会員番号を記入の上、ご応募ください。
※応募者多数の場合、抽選になります。

◆宛先
〒九二〇―〇九六三
金沢市出羽町二―一
石川県立美術館「文化財現地見学」係

◆平成二十二年九月二十九日（水）必着。
※犬山城の見学は、徒歩による移動で、急な坂道・階段が含まれます。

九月の行事予定

■土曜講座　午後一時三〇分～　美術館講義室　聴講無料

四日（土）	「徳田八十吉三代」	講師／南　俊英　担当課長
十八日（土）	「長谷川等伯　国宝『松林図』を読み解く」	講師／村瀬博春　学芸専門員
二十五日（土）	「石川県の仏像」	講師／谷口　出　普及課長

■ビデオ上映会　午後一時三〇分～　美術館ホール　入場無料

十九日（日）	日本の美 9「境の思想―空間の美意識―」	（二十五分）
	日本の美 10「光と影―西欧との比較―」	（二十九分）
二十六日（日）	日本の美11「もう一つの日本美―土佐の絵金―」	（二十五分）
	日本の美12「琳派の系譜」	（二十九分）

次回の展覧会

会期／十月二十八日(木)～十一月二十八日(日)

前田育徳会尊経閣文庫分館	「万葉集の世界―平城遷都1300年―」
第2展示室	「曹洞宗の名刹　大乗寺の名宝」
第4展示室	「開　光市展」
第6展示室	「系譜で見る近代日本画」

会期／十月二十九日(金)～十一月七日(日)

企画展示室	「第57回　日本伝統工芸展金沢展」

「バラライカを持つ裸婦」ばらいかをもつらふ　平成6年　縦158.6cm×横196.0cm　油彩キャンバス　所蔵品紹介209

東　典男　あずまのりお　昭和3年（1928）～平成16年（2004）

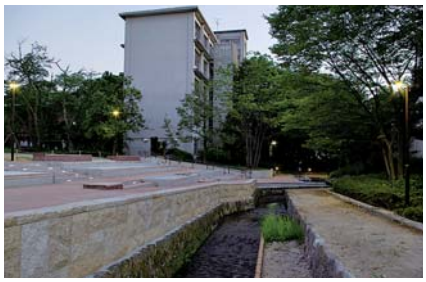
バラライカを手にした裸婦が綺麗な赤紫色の中に大きく描かれています。本来ならば影が生じるはずですが、影はなく、中空に浮かんでいるように見えます。人体と背景との関係は描かれずに、この二つが併置されているのです。図版では赤紫は平滑に見えますが、実際は全面に細かな凹凸が施されています。作者は筆を垂直に画面に押しつけて点描のように赤紫の色面を埋め尽くすのですが、このざらついた色面の存在感はなかなかのものがあります。

さて、この裸婦ははたして横たわっているのでしょうか。時計回りに九〇度回転すると、腰かけてバラライカの弦を見つめながら弾いている姿になります。つまり実際のポーズを回転させ、無重力状態にあると見える裸婦にしたのです。作者の巨大な裸婦作品は実在感を排除したものが多く、このことが象徴性を生む要因となっています。

東氏は金沢美術工芸短期大学を卒業後、一九五五年に渡米し、油彩によるシルクスクリーンの抽象作品によってアメリカ画壇で大活躍します。十年間ほどで七千点以上の作品を制作し完売したといいます。しかし、大病し、もう一度自分にとって絵とは何かと考えたとき、裸婦に生命の象徴を見いだしたのでした。強い色面の上に形取られる白い裸婦、これは抽象作品同様、陰影のない色面による構成であり、また余分なものをそぎ落とし、エッセンスだけを抽出した姿ともいえます。

気づきましたか？ 新しい本多の森

兼六園周辺文化の森歩行回遊ルート整備計画の一環として、美術館横の工事が進んでいます。夜間景観、安全性を高めるための照明が備えられ、広くゆったりとしたベンチが完成しました。このあと広がりや見通しを持たせる樹木整備や緑地整備が進みます。



夕刻の辰巳用水と修復工房

美術館と修復工房の間を流れる辰巳用水の川べりに、階段式のベンチがお目見えしました。

ご利用案内

コレクション展観覧料

一　般　350円（280円）
大学生　280円（220円）
高校生以下　無料
※（　）内は団体料金

9月の開館時間

午前9：30～午後6：00
（11日・18日・25日は午後7：00まで開館）

カフェ営業時間

午前10：00～午後7：00

石川県立美術館だより 第323号
2010年9月1日発行〈毎月発行〉
〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580　Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

9月の休館日は
8日（水）～10日（金）です

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています